

1. 論語読みの論語知らず

過去から現在まで、全国各地で多くの酪農家にお会いしてきたが「牛が分かりました」と発言した方はゼロである。一方で、実際に牛を飼ったことが無い方々から「牛が分かりました」という発言を聞く事がある。筆者が知るそういう方々の大半は、短期間牛の近くに居たか、牛飼いの真似事をした程度の経験しかお持ちでない。もし、この程度の経験で「牛が分かりました」と発言されるのであれば、それは類い希な才能をお持ちか、「牛が分かった」と勘違いしただけのことであろう。酪農科学は広範に渡り奥行きも十分に深く、一人が簡単に学びきれものではない。同様に、実際の農場は、日々が変化の連続であり、そう簡単にバツサリ言い切れるほど単純ではない。ましてや、一人の人間が酪農全般をカバーすることはあり得ないことである。

牛を飼っていれば、何も事件が起きずに心安らかに過ごせる期間が半月もあれば驚きである。油断をした時に限って牛に何か起きる。たとえば四変である。近所の酪農家に「どうだいこの頃は？」と問われて「最近は何変にならない」と語った翌日に四変である。生き物を飼うというのは、そういうものかもしれない。だから、牛に愛着が湧き、切っても切れない関係になるのかもしれない。これを称して、酪農は奥が深いということになるのだろう。

さて、「論語読みの論語知らず」の意味は、「論語に書いてあることを知識として理解するだけで、それを生かして実行できない人をあざけていう」である。酪農現場で知識のようなものを伝達する役割を担っている方々は「論語読みの論語知らず」になってはいけない。この時代背景を考えれば、酪農家には無駄な時間やコストを費やす余裕はない。現実から逃避した理想論や自慢話ではなく、良い方向に向かって変化を起こせる実践的な助言が必要である。

2. 超えられないもの？

牛を飼っていれば、思い通りにならないことが連続するのが常である。しかし、それにも限度がある。そこを乗り越えなければ牛飼いを続ける意味を失いかねない。

超えられないものの第一として挙げるのは粗飼料である。粗飼料は、まず量であり次に品質である。給与量が不足している時に、品質云々は話にならない。超えられないものの第二は施設である。施設は、まず牛床、次に換気である。率直に言えば、どちらの影響が大きいかわかりがたい。いずれにしても、施設は牛床と換気の水準で決まりである。

超えられないものの最後に挙げるのが人間である。一日24時間は誰もが共通である。時間に余裕が無ければどうしようもない。一日24時間のすべてを牛に費やす人はいないだろう。大切なのは、限られた時間をどう配分し思ったとおりに牛を管理するかである。その意味で時間である。最後は考えた量である。思い通りに牛を飼うために、何をしたら良いかを考えた量である。勉強ができるとか、学歴がどうという話ではない。勉強ができて立派な学歴があっても牛飼いで成功することの保証にはならない。具体的に、地道に考えた量が牛飼いを成功に導く。考える対象は、世の中への不満や世界の穀物情勢では

ない。目の前の牛がどうであるか、それをどうするかについて考えた量である。

筆者がここで申し上げているのは、「こうすべきだ。そうあるべきだ」という上から目線の話ではない。長い間牛を飼い、成功体験を重ねるうちに誰もが気づくようなことを意味している。気付きは早い方が有利であり、早い分だけ成功の度合いも大きくなる。考える量の多寡は、気付きの遅速の差になる、という意味である。

筆者は講演でこの「超えられない概念」を申し上げる。それは、現状を打開するための三つの要素とその中身を意味する。その後で、こういうことも付け加えることにしている。「牛飼いで成功しようと思った時の順番はここに挙げた項目の逆です」。つまり、「考えた量→時間→換気→牛床→品質→量」である。

3、なんとかする

筆者は、十勝管内士幌町にある「西上加納農場」に事務所をおき、農場の酪農部門の顧問をしている。その西上加納農場の専務の口癖である「なんとかしろ」を紹介したい。この「なんとかしろ」という言葉には深い意味がある。

なんとかするためには基準が必要である。その基準に近づいた状態がなんとかになった状態である。つまり「なんとかしろ」は、基準に近づけるために、どうしたら良いかを考えて実行しろ、という意味である。

リスク因子という言葉がある。リスク因子とは、特定の疾患にかかりやすい生体の形態的・機能的要素である。たとえば、我々で言えば、動脈硬化症のリスク因子は高コレステロール血症である。

我々が口にする「管理が良い。管理が悪い」という意味は、リスク因子に対して対策が取られているかどうか、という意味でもある。

そのリスク因子に対して関与することが「なんとかする」ということである。その時に考え方の基準がなければ、それは単なるお話であり、お勉強である。

基準は、理想でもある。しかし、農場では「できることとできないこと」がある。実際には、分かっているてもできないことの方が多いだろう。そこで、筆者は「理想に近づける」という考え方をする。この「理想に近づける」という考え方は、昨年の夏に我々の蹄管理講座で講師を務めていただいたオランダのピーター・クロスターマン氏から学んだものである。

「なんとかする」という考え方の本質は、現状を理想に近づけるために考えることであり、実践することである。

4、長命連産

偶然であるが、九州と北海道で長命連産に係わる考え方に触れる機会があった。

九州の方は、大規模な牧場で経営のマネジメントをしている経理畑の女性である。酪農経営に相当に高い見識をお持ちの方であった。その女性は、ご自分がマネジメントしている牧場の経営的な課題を整理するために、牧場に蓄積された数千頭のデータから、代表的な牛を抽出して損益を求めておられた。口で言うのは簡単であるが、相当に忍耐強い作業であったことは想像に難くない。

その解析によって分かったことは、オーナーに利益をもたらしたのは、一乳期で乳量が

多かった牛ではなく、長命連産の牛であった。言い換えると、健康で数多くの子牛を生み、それなりの乳を生産した牛がオーナーに利益をもたらしていた。その典型的な牛を紹介すると、9歳で6産を生み、生涯乳量は約4万8千キロである。平均すると一乳期で約20万円の利益をオーナーにもたらしている。一方で、4～6歳（2～3産）で農場を去った牛の約半数は、オーナーに利益をもたらすことなく、むしろオーナーの財布からお金を抜き取っていた。つまり、マイナスである。その中には、一乳期で高乳量を達成した牛もかなりの数含まれていた。

北海道の上川地方在住の著名な生産者と食事をする機会を得た。そのオーナーの目標は、一頭五万キロ生産である。何歳何産で5万キロかは問わないそうである。とにかく生涯乳量の平均を5万キロにすることが牧場の目標とのことであった。この考え方は、前述した九州の方と基本的に同じである。奇しくも同時期に南と北で同じような考え方に触れる機会を得たことに感謝したい。

さて、生涯乳量と経営の関係は、古くから言われてきたことは周知のとおりである。しかし、いつからか短期間の乳量に目が奪われ、生涯乳量の経営的な意味を忘れてしまった感がある。

多くの酪農家の経験では、乳量が高いことと手元に残るお金の量とは必ずしも一致しない。個体の乳量が増えたことで出荷乳量が増え、乳代も増えた。一方で濃厚飼料等々の出費が増えて、手元に残るお金はそれほど多くはなかった。

この解釈は、たぶん一面的に過ぎるであろう。

一頭当たり乳量が高いことと、一頭当たりの利益が大きくなることは同義である。しかし、現実にはそうならない理由は、牛そのものが体調を崩して牛舎から去るからである。違った見方をすると、大量に濃厚飼料を給与して乳量を得て、乳代を得たが、一方で牛は健康に破綻を来し牛群から去ってしまった。そこで、元も子も失った、これが乳量と利益に関する経営的に正当な見方と解釈であろう。

前述したお二方の考え方が意味することは、乳牛は子を産み、乳を出し、そして本牛が残る。本牛が残るから、また子を産み、乳を出す。その本牛を短期間で失うような経営は長続きしない、ということである。

ここで紹介したお二人の会話は、個体乳量や飼料価格などには一切触れずに、牛を飼うための目標と、なぜ酪農なのかという話題に終始していた。これは、鮮烈な印象として記憶に残っている。

5、長命連産を阻害するもの

さて、牛が牛舎を去る理由は何であろうか？言うまでもなく乳房炎と蹄病、そして繁殖である。筆者は二十数年間、これを乳牛の三大疾病と呼び、その根底にあるのは周産期疾病であると語り、書いてきた。さらに、それぞれの問題は、独立して存在するのではなく、根本は同じであるから、どれか一つを解決しようとすれば、いずれもが改善されると主張してきた。つまり、三大疾病の根底にある周産期疾病が減らなければ、牛群から牛が去ることをくい止められない。その周産期疾病をゼロにする唯一の方法は、分娩をさせないことである。しかし、それでは酪農経営が成立しない。

牛が牛群を去る原因は、分娩にある。何とも皮肉な話である。農場にとって良い事も悪

いことも、すべて分娩を起点にして起きる。そうであれば、長命連産を達成するためには、健康に分娩を迎えさせることが鍵になる。

そのためには、乾乳牛用施設を作れば良いとか、乾乳期の栄養が大切だという、常識的な主張を繰り返すことに意味はない。言葉は正しくても自らの牧場で、実際のやりようが見つからなければどうしようもない。筆者が以下に述べるのは、単なる施設や栄養ではなく、もう少し大きな視野からの話である。

6、心の窓

酪農家の名言を紹介したい。筆者が事務所を置いている西上加納農場の社長の言葉である。「牛が好きな人間は、牛に心の窓を開いているから牛の変化に気が付く」。

牛の気持ちになれ、牛を大切にしよう、というかけ声は正しいが、現実にはそれが出来る人と出来ない人がいる。その違いは、牛に対して「心の窓」が開いているか、閉じているかで大半を説明することができる。

筆者は牛について牛の立場から随分と書いている。まるで牛から生まれて牛になった経験があるように！もちろん、筆者は牛から生まれたのでもなく、牛になった経験もない。前述した社長の言葉を借りると、おそらく筆者は牛に対して心の窓が開いているから、牛から発信される小さな表現に気づくのかも知れない。

同じことは酪農家と接する人たちにも言えるかもしれない。酪農家に対して心の窓が開いているか、閉じているか、それが重要である。上から目線で話す人、書く人。少しばかりの経験ですべてを知ったと勘違いしている人。技術やアイデアやモノを隠れ蓑にして酪農家から利益やチャンスを引き上げていく人。・・・。

7、自分型酪農

様々な地域で数多くの酪農家を訪問し感じることは、毎日毎日牛にエサを与え、乳を搾り、糞を出すことは共通しているが、その方法と経営の有り様や考え方が随分違うことである。

どこで牛を飼っているかによって、経営の規模や飼養形態、食わせる粗飼料が異なる。もちろん、数料の違いも同様である。この違いに対して、どれが正しいか、何が目指す姿か、という訳の分からない議論には意味がない。唯一正しいと思えるのは、経営者がやりたいようにやる事である。経営者が「やりたいようにやる」という意味は、筆者の理解と解釈では、「酪農家の自尊心」であり、「ものづくりのプロ」として乳と牛を生産する気概を示す事である。

経営は、思ったとおりにならないのが常である。だから、経営能力云々などと言う言葉があるのだろう。自分の意志で「やりたいと思ったこと」をやり、経営的な成果が出れば「経営能力が高い」と言われ、結果を出せなければ「経営能力が低い」と評される。経営の成果を「経営能力」という言葉だけで片付けるのはいかがなものか、と筆者は思う。大切なのは、何故「思った結果」にならなかったかである。

たとえば、大規模経営を夢見て投資を行ったとする。しかし、何年経っても牛が増えずに拡大が頓挫しているケースがある。あるいは、経営安定の手段として一頭当たり乳量の向上を目指したとする。その結果、たしかに乳量は上がったがエサ代も増えて手元に残る

お金は驚くほど少なかった、というケースも珍しくない。では、なぜそうになってしまうのか？そこが考えどころである。

北海道内のある町で巡り会った酪農家には驚かされる発想があった。仮にこの方をA氏と呼ばせていただくことにしよう。このA氏は新規就農の方で、奥様と二人で酪農を営まれていた。A氏は就農から数年間、最新技術を勉強し高乳量を追求したそうである。その結果、乳量は上がったが忙しさと牛の病気に苦しみ、その割には経営的に楽にならなかったそうである。そこでA氏は楽にエサを給与する方法を考えた。A氏が行ったエサ給与は、搾乳牛すべてに、配合もビートパルプも定量を給与する方法である。粗飼料はカッティングされた高水分グラスサイレージのみで、これまたほぼ定量給与である。その結果、予想どおり乳量は下がったそうである。

飼養方法を変えて以降、乳量は下がったが、仕事は減り、壊れる牛も激減したそうである。この方法は、乳牛の栄養学の常識で考えれば、いつも栄養が不足する牛と過剰な牛がいて、ちょうど良い牛は滅多にいないことになる。しかし、この考え方には「なるほど」と頷けるものがある。分離給与という方法で一群TMRをやっていると考えれば良いわけである。限られた労働力で、分娩後日数や泌乳ステージの異なる牛を分離給与で飼うことは、「言うは易く行うは難し」である。過去にA氏の牛は乳量が上がったが事故が増えた、言い換えれば乳は出たが牛も出て行った。これは、分離給与で個体の要求量に応じたエサを給与することがどれほど難しいかを物語る。濃厚飼料を食わせたら乳が出た、乳が出たら栄養が足りなくなる、だからもう少し濃厚飼料を食わせる、結果として牛が壊れる。この悪循環に陥った原因は粗飼料を食わせなかったから、と言うことは簡単である。もちろん、A氏がそのことを知らなかった訳ではない。分かっているにもかかわらず出来なかったというのが正しい理解であろう。

飼養法を変えてからA氏は、管理作業が楽になり、牛は壊れなくなったそうである。これは、A氏の経営資源に調和した経営スタイルが確立されたと捉えることもできる。

A氏の経営資源とは、A氏夫妻の酪農に対する力量と経験であり、牛であり、繋ぎ牛舎であり、そしてグラスサイレージの品質と量、さらに土地条件などを意味する。A氏は、これらの資源を生かして、人にも牛にも無理をかけることなく結果を生み出す最適な組み合わせにたどり着いたと言える。

「部分最適」と「全体最適」という考え方がある。部分の最適化を図ることが、必ずしも全体の最適化につながらない、という考え方である。この考え方を理解するためには、「システム」という概念を理解する必要がある。筆者の考え方では、「システムとは、異質な機能を組み合わせることで新しい機能を生み出すこと」である。システムの特徴として、部分が正常であっても全体が正常であるとは限らない。このことは、搾乳システムを例にすると分かりやすい。たとえば、調圧器が正常に作動し、真空ポンプも定格能力で作動していたとする。調圧器が正常であれば、適正な真空度は確保される。一方で、真空ポンプは正常に作動していても、その排気量がシステムの要求量を満たしていなければ、有効予備排気量が不足する。それは正常な搾乳ができないことを意味し、すべてが帳消しである。したがって、部分が正常かどうかを計測し評価する「いわゆるミルカー点検」ではなく、「ミルキングシステム分析」という手法が必要になる。

同じことは酪農経営にもあるだろう。たとえば、一頭当たり乳量が高いことは素晴らしい

いことであるが、濃厚飼料の給与量を増すだけでそれを達成するのは困難である。牛が高乳量を出せる仕組みが必要である。それは、高乳量生産に見合う品質の粗飼料、高い乾物摂取量を維持できる飼養環境、十分に栄養を摂取できる給与システム等である。それらが揃って始めて牛を壊さずに高乳量が達成される。そのためには、ある部分だけが突出しても意味がない。その典型が、粗飼料の品質を横に置いた濃厚飼料の給与回数の議論である。分離給与で濃厚飼料の給与回数を増やすのは正しい考え方であり、それは「部分最適」である。一方で、そのことが酪農家から時間と体力と集中力を奪うのであれば、それは「全体最適」とは言い難い。

自分型酪農は、筆者の造語である。自分型酪農の反対側に「〇×型酪農」という言葉がある。北海道型酪農、放牧酪農、購入粗飼料依存型酪農、大規模集約酪農、都市型酪農、・・・挙げればきりがない。このように酪農を「ある型」にはめて分類して論じることによってどのような意味があるのだろうか？本当にそういう「〇×型酪農」という酪農経営はあるのだろうか、いささか疑問を持たざるを得ない。

筆者は独立する前は公務員として技術的な側面から酪農振興に携わっていた。その時の仕事の一部に「営農類型」を作成するというものがあった。これは、酪農をいくつかの型に分類し、それぞれに必要な土地や施設・装備などを考慮した経営シミュレーションである。その作成にあたって感じていた疑問は、類型のような経営は存在するのだろうか、である。たぶん、存在しないだろう。

酪農は経営者の数だけ経営のやり方がある。酪農を営む目的もやり方も、随分と個人差が大きい。それはそれで酪農の有り様と考えた方がよく、それが酪農である。

人の数だけ酪農の世界観があるとすれば、経営者の数だけ酪農のやり方があってもおかしくない。むしろ、それが健全というものだろう。

自分型酪農を確立するためには、前述したいくつかの方法で生産性を評価すること、併せて、様々な酪農の現場を、先入観を持たずに見て話を聞く機会を増やされることを奨めたい。実際にやっておられる酪農家の事例に優るものはない。